



御嶽山などの眺めが素晴らしい自然村

都市・農村交流拠点

# 地元農家が親身にサポート—農山村生

木曽駒高原自然村（長野県木曽町）

## ■ 取り組みの内容

都市から脱出して農山村で生活しようという動きが始まっているものの、農山村の生活がどんなものか、生活を丸ごと体験ができるシステムは多くない。「木曽駒高原自然村」は、こうした農山村生活入門のシステムとして、ハード面でもソフト面でも、ほぼ完璧な事例といえる。長野県木曽町は、塩尻から南に約40km、人口1万4000人弱の町であり、高齢化が進み（平成20年、33%）、多くの過疎集落を抱え

ている。木曽川沿いの古来からの主要な動線である中山道の宿場町木曽福島町を核に東の木曽駒ヶ岳と西の御嶽山<sup>おんたけさん</sup>を町境とする広大な町域を持っている。

JR中央西線木曽福島駅からほぼ東へ車で20分ほど木曽駒ヶ岳の山麓の緩い傾斜を登ると、既存の村落に抱かれるようにして16棟の畑付き木造2階建ての住宅が立地している。この住宅と管理棟1棟で「木曽駒高原自然村」（以下、自然村）がある。夏場は涼しく快適であるが、冬は雪も深く

氷点下になる厳しいところである。自然村は、農地付きの別荘を1年単位で賃貸契約（1区画、月額4万円）し、庭先の畑で野菜づくりを行うとともに、さまざまなイベントを通じ、入居者、地域住民との交流が図られている。農作業は、地域の農業従事者から指導を受けることができ、草刈り機等の簡単な農機具は共用となっている。契約期間は最長5年で、その間に木曽町での新しい生活の展望が開けた場合には、改めて別途住宅を購入するか借りるかして新たな生活を始





自然村



開田高原就農トレーニングハウス



豊富な観光資源

## 活入門の場

めることになる。施設は現在満杯で、毎年11月になると翌年度の賃貸意向の聞き取りがあり、契約更新か打切りを決めなければならない（打切りの場合は3月には明け渡す）。空きがでると公募して抽選（12月）を行うことになるが、倍率は極めて高いとのことである。この事業は、平成9年に10棟、12年に6棟が建設されてスタートし、管理は、地元住民（57戸）によって「大原自然管理組合」が組織され、自然村の指定管理者となっている。



移住された小林さん（左）と管理人の奥原さん（右）





## ■ 地域とのかかわり (利用者、管理人)

自然村を卒業してすぐ、近くに家を建ててご夫妻で新しい生活を始めた小林さんとお試し期間中の村田さんにお話を聞くことができました。

小林さんは元名古屋市職員。4年前にこの自然村を卒業し、民生委員の紹介で660m<sup>2</sup>の土地(うち250m<sup>2</sup>は畑)を賃借し、家を建て、ご夫妻で生活。農地は借り増し、現在は1500m<sup>2</sup>(1.5反)を借りて耕作している。年間の賃料は10万円。そのうち400m<sup>2</sup>は蕎麦畑としている。出身が長野県ということと、名古屋市役所勤務のころから貸し農園で日曜農業をやっていたので、退職後、自然にこの生活を選んだということである。

村田さんはお試し期間といっても、木曾町の御岳山麓にあるもう一カ所の施設(サンファーム大洞)に7年

(この地区は5年という制限が無い)居て、自然村に移って来たというつわもの。生活拠点は浜松市だが4月から10月くらいまでご夫妻で生活するという2地域居住の実践者である。

地元側の意見を話してくれた管理人の奥原さんは、減反による地域の衰退を何とかしなければということがかきかけとなって、町(当時木曾福島町)からの呼びかけに積極的に応じた経緯がある。自然村の整備で地域がにぎやかで明るくなった感じを持っており、管理人という仕事にもやりがいを感じていた。

## ■ 事業収支

平成20年度の決算書で管理組合の事業収支を見ると、年間の総収入は818万8000円、そのうち768万円(約94%)が賃料収入、他に交流会参加費23万1000円と前年度からの繰越金23万4000円等。支出では、管理人の給

与152万2000円、木曾町への納付金150万円、土地借上料121万7000円等が大所である。20年度は、新たに整備したあずま屋と側溝・暗渠あんきよの整備費のため約90万6000円の支出があったが、総支出は792万4000円に収まり、翌年度へ26万5000円を繰り越し、前年度からの繰越金に3万1000円を積み増している。

## ■ 成功のポイント

この自然村の特長の一つは、既存の村落の多くの農家と接して立地していること、この事業が村落の人々の理解を得て進められた経緯もあり、体験入居者を共同の生活者として受け入れていることである。さまざまな交流事業が年間を通じて行なわれているだけでなく、夕方になるとあずま屋に一品程度を持ち寄り、宴会が始まるというハブニングもあるそう。その恩恵で16棟の体験住宅は空





ソバ刈入れのようす



畑にできた芋を収穫



農業講習会

きがなく、町にも毎年150万円の賃料が入る健全経営がなされている。

成功のポイントを挙げると、第1のカギは地区の戸数57戸に対し体験住宅16戸というバランス、つまり適正な設置規模にある。第2のカギは地域の人々が都市からの参入者に対して歓迎するという気持ちであり、第3のカギは、地域の人々と参入者をつなげるハード、ソフトのシステムづくりである。ハードでいえば、既存集落に溶け込むような住棟配置と住宅デザイン、ソフトは、交流イベントや

景観や環境を守るための「規則」だと思ふ。

### ■ 今後の取り組みと課題

田中町長は、広大な地域に活力を持続させるには、都市からの移住者が不可欠という。木曾町の一部地域では、人口減をほぼ補うだけの人口流入が認められ、それなりの政策効果があったと考えられるが、小さな自治体ではやれることに限度があるとも。今後、こうした都市からの移住を助ける国の支援策（制度と資金）の拡

充が必要であること、また、そうしないと国土が立ち行かなくなるのではないかと強く言われていた。

課題としては、ここの生活から木曾町に住んでみようという意志を固めた後のフォローシステムの構築が挙げられる。先に紹介した小林さんは、親しくなった民生委員の紹介で土地を見つけたが、こうした偶然性だけでは定住者を増やすのは難しい。木曾駒高原自然村が大学であるとする、その大学院のようなシステムの構築が望まれる。

#### プロジェクト概要

所在地：長野県木曾町新開355-1  
木曾駒高原自然村  
規模：総面積1万7354m<sup>2</sup>（田6430m<sup>2</sup>、畑4597m<sup>2</sup>、原野6327m<sup>2</sup>）、全16区画、平均的1区画400m<sup>2</sup>（農地70m<sup>2</sup>、建べい地・庭330m<sup>2</sup>）、建物（木造2階建 延床面積70m<sup>2</sup> 10棟、木造平屋延床面積54m<sup>2</sup> 6棟）  
地権者数：6名  
土地賃借契約：5年、契約期間終了1月前に双方解

約を申し出ることができる。申し出ない場合、自動的に契約継続。契約解除後の現状復帰等については双方の協議で決定。  
賃借料 年間平均70円/m<sup>2</sup>  
事業手法：平成9年度の10棟/山村振興等農林漁業特別対策事業  
平成12年度の6棟/やすらぎの交流空間整備事業  
事業費：平成9年度 2億28万8000円

国県補助1億14万4000円、起債1億10万円  
平成12年度（ふるさと体験館事業と併せて）4億131万3000円  
国県補助2億80万円、起債2億円  
事業主体：木曾福島町（合併前）  
管理運営主体：木曾駒高原自然村管理組合（地元農家で構成）  
付帯施設：管理棟1棟、あずま屋2棟  
土地利用規制：農振白地